

極寒のシベリア抑留の思い出

富山県 黒川 隆

終戦の詔勅、天皇陛下の玉音放送を雑音まじりのラジオで聞いた所は、黄海に面した鎮南浦の飛行場だった。

沖縄も米軍によって陥落し、本土決戦に備えて、在支第五航軍のすべてが朝鮮半島に集結、昭和二十（一九四五）年五月二十二日私が属する第五十六対空無線隊（隼一九一五四部隊、独立中隊、隊長越智達郎大尉）も中隊本部を平壤（ピョニャン）に置き、私の分隊は鎮南浦飛行場に展開していた。私はたまたま対空無線通信手として、敵艦に体当たりする特攻機との通信訓練に明け暮れる毎日であった。

終戦により、各飛行場に展開していた各分隊は、平壤の中隊本部（日本人小学校を借り上げ）

に集結。進攻して来たソ連兵の捕虜となり、対空無線機器、九九式歩兵銃等武器を返還、平壤近郊の陸軍演習場三合里に収容された。

三合里で二カ月余を過ごし、十一月三日、平壤駅から貨車に乗せられ、同月五日、日本海に面した咸興の港に到着した。

その当時咸興には日産化学の大工場があり、ソ連兵の監視指揮のもと、各種工場施設、港湾施設を撤去し、ソ連へ運ぶための解体荷役作業に「ダワイダワイ」と使役に責められていた。十二月二十四日まで続いた。

十二月二十五日、七、八千トン級の貨物船が咸興の港に接岸、いよいよ日本へダモイだと一千人の日本兵捕虜が船に積み込まれ、船底は立錐の余地もない程で、便所へ行くのもままならない状態であった。

日本へダモイと聞かされているのに、出港した船の左側に陸地が見え、船が北上しているのが明らかで、そのうち、ウラジオストクを経由して

日本へ帰るのだとうわさが流れた。

昭和二十年の暮れも押し詰まった二十九日、ウラジオストックに入港、元日を船中で迎え、船は一月三日まで停泊した。

その間また使役に駆り出され、積み込んだ荷物は医薬品、担架等であつたため、これは日本へ帰るところかともない危険な所、例えば要塞構築等のために連れて行かれるのではないかとうわさしきりで、あきらめの空気が船内をみなぎつた。

船は一月三日ようやく出帆した。果たして船は左手に陸地を見ながら沿海州を北上し続け、当時極寒のさなかのため、海は氷結しており、途中から砕氷船の後を航行、一月十日氷上へ下船、一千人の日本兵が氷上約一キロをトボトボと歩いた。途中若い軍医の見習い士官が過労と衰弱から氷上で倒れ死亡しているのを横目で見ながら上陸した。

上陸したところは、サハリン対岸のソフガワ

ニであることが後程わかった。

上陸してから人員は二百人単位に分断され、それぞれ違ったラーゲリに収容され、落ち着く間もなく強制労働に「ブイストリ、ダバイダバイ」とソ連兵に追いかけられる日々が続くこととなる。

日の短いシベリアの冬、朝七時過ぎの薄暗い時間、ラーゲリ門前で五列に並んで点呼、原始林の山へ連れて行かれ、マンドリンの自動小銃を持ったソ連兵の監視のもと伐採作業に入った。

切れない鋸を二人で相向かいに引き合せて、直径四十―五十センチのトドマツ、カラマツを切り倒し、五メートルくらいに玉切りにして、数人で綱を引きながら谷底へ転げ落とす作業が毎日続いた。

夏七月になると谷底の氷が解けて水が流れ出して川となり、自然と材木が流れ出し、流れ出した材木を河口をせき止めて集め、製材所へ運ぶか、または船に積み込む作業が夏季の主な仕事であった。また、夏季には道路工事、家の新築工事等に

もよく当てがわれた。

伐採作業で倒れた木の下になって死亡した兵も何人かいた。

ラーゲリで、隣に寝ていて、よく話し相手になつてくれた大阪府八尾市の岡田上等兵が朝起きないので、よく見ると死亡していた。同室の戦友三人でラーゲリの裏山へ運び、一日がかりで凍土を鉄棒でコチンコチンと身体が隠れる程度の穴を掘り死体を埋めた。この作業はソ連兵の監視もつかず、まことにゆつたりした気分で作業することができた。

二百人収容されていた私達のラーゲリで、昭和二十一年～二十二年にかけて約七十人の死亡者が出て、裏山は埋葬の余地がなくなる程であった。

伐採作業からラーゲリへ帰る途中七人の兵が衰弱と疲労で倒れ死亡。また、発疹チフス、赤痢等の病気で収容所の医務室へ入室した者はほとんど不帰の客となつて、部屋へは戻って来なかった。

一晩で二十人も死亡したときもあった。

何としても支給される食事がまことに劣悪で、小さな黒パン一切れと、十粒程のグリーンピースの入った汁だけの食事が何日も続いた。

このような栄養失調を来たす食事は、ラーゲリを管理するソ連の将校が日本兵に支給される糧秣を横取りしているとのことであつた。

夏、道路工事をしているとき、近くの民家の窓から白髪の老婆が「ヤポンスキー、イジスダー」と手招きし、大きな白パンをくれたとき、人間性を感じ大変嬉しかったことが今でも忘れられない。

七月十五日、ソフガワニー駅から貨車に乗せられ、いよいよ日本へダモイだと聞かされた。ボルノイ（病気）部隊で使いものにならないから、早く日本へ帰すのだと、ソ連の将校が話しているのを聞いた。

列車はガタゴトとゆつくり走り、ハバロフスクを經由して七月二十五日ナホトカに到着した。

日本海を目にしたときは、今度こそ本当に祖国

の土を踏めると胸が躍った。心にもないスターリン万歳を何回ともなく唱えて船を待った。

七月三十一日入港して来た引揚船恵山丸に乗船した。日本海は波静かであった。

昭和二十二年八月三日、舞鶴に上陸、懐かしの祖国の土を踏み、米兵の取調べとDDTの消毒を受けた後、帰郷の車中の人となった。

北陸線小杉駅ホームに老母をはじめ家族一同が迎えにきていた。その中に妹芳子の顔が見えないので尋ねると、母がどっと泣き崩れた姿が今でも忘れられない。妹は富山郵便局電信課に勤務、昭和二十年八月二日未明の富山大空襲で当日夜勤であったため殉職していたのであった。

終戦後半世紀がたった今日、戦争を知らない人が七割いる時代に、戦争の悲惨な体験を語り継ぐ事こそ重要なことと思ひ筆を取りました。

注釈

※ダワイダワイ 早くやれと攻めたてる言葉

※ダモイ 帰る

※ラーゲリ 収容所

※ブイストリダバイ 早くやれという意味の言葉

※ヤボンスキー、イジスター こちらへ早く来な

さいという言葉

軍歴書

陸軍上等兵 黒川 隆

大正十一年十二月二十五日生

昭和十九年八月一日 現役兵として第一航測連

隊（中部第一三〇部隊）

へ入営、第三中隊へ入隊

陸軍二等兵

十四日 航測無線修業を命ず

二十八日 第二中隊に編入を命ず

二十年二月十日 陸軍一等兵

三月三日 第五六対空無線隊（隼一

九一五四部隊）へ転属

浜松出発

四日 門司着

七日 門司出帆

八日 釜山上陸

十二日 鮮満国境(安東)通過

十四日 満支国境(山海関)通過

十五日 済南到着翌日より同地駐屯

五月十七日 部隊転進のため済南出発

二十日 満支国境(山海関)通過

二十二日 鮮満国境(安東)通過

二十二日 平壤到着翌日より同地駐屯

八月一日 陸軍上等兵

十一月三日 平壤出発

五日 咸興到着

十二月二十五日 咸興出帆

二十九日 ウラジオストック到着

二十一年一月三日 ウラジオストック出帆

十日 ソフガワニー上陸

二十二年七月十五日 ソフガワニー出帆

二十五日 ナホトカ到着

三十一日 ナホトカ出帆

八月三日 舞鶴上陸

十日 復員 除隊 以上

【執筆者の紹介】

元職 陸軍上等兵

氏は厳父佐吉氏と母堂まつえさん夫妻の五人姉弟妹の長男に生まれ、昭和十二年郷校卒業後、富山県立小杉農学校に進学したが、思うところあって十月一日より名古屋通信講習所金沢支所普通科に入学、昭和十三年卒業した。同時に新湊郵便局へ配属となった。

昭和十六年厳父が心不全で急死するという不幸に見舞われたが、氏は気持ちを確かにして、予定どおり名古屋通信講習所高等科に入学した。翌十七年富山郵便局電信課に配属となった。

徴兵検査に甲種合格した氏は、昭和十九年八月一日現役召集で、浜松第一航測連隊中部第一三〇部隊に入隊した。昭和二十年三月対空無線隊に配属となり、釜山を経由、北支済南に派遣された。その後部隊は本土決戦に備え平壤に移動。氏の属する部隊は黄海鎮南浦で軍務に就いた。もちろん氏は知る由もなかったが、同年八月二日富山は米機の大空襲にさらされ、妹芳子さんは富山郵便局で殉職した。

部隊は、八月十五日、終戦により、平壤でソ連軍の捕虜となった。同年十一月三日、日本海に面した威興に到着、十二月二十五日ダモイの声を真に受けて到着した港は、ウラジオストックであった。北緯五〇度線のカラフトの対岸ソフガワニーに連れられ、抑留生活が始まった。カラマツやトドマツ等の原始林の伐採の重労働、食糧不足、栄養失調、劣悪な衛生状態などにより、召集兵のほとんどは、この厳寒の地にあたら命を落とした。仲間でようやく身体が隠れる位の穴を一日掛かり

で掘り、墓標を建てることもできず、戦友を葬った。

昭和二十二年七月二十一日ナホトカを出航、八月三日夢にまで見た舞鶴港に生きて祖国の土を踏んだ。小杉駅で妹の顔が見えないのに気づいた氏は、母堂に尋ねると、どっと泣き崩れた姿を今でも忘れない、という。

氏は復員した年の十月、富山郵便局に復職、翌二十三年輝子さんと結婚した。輝子夫人は氏の母堂によく仕え、二女を立派に育てあげ、氏を内側から支え、内助を尽くした。氏はいつそう業務に精励、頭角をあらわした。各電報電話局の庶務課長、労務厚生課長、運用部長、局次長を務め、朝日電報電話局長を全うし勇退した。平成二年、シベリアの労苦に対し総理大臣銀杯が授与された。金婚式も済み、悠悠自適である。

(富山県 山田 秀三)